6月「Frühsommerliche Freiheitsgefühle」
アントニア・シュルト

1.一月の半分を超えたら、もうそろそろ今回のコラムのテーマを考え始めた方がいいと感じて、無意味に少し焦るときがあります。今日、16日にそうなりました。カフェインが入っている飲物を特別に飲んでも、アイデアがなかなか出てきません。何もせず、つくねんと座っていて、同僚に見られたら、ぼうっとしているように見えるでしょうが、必死に考えているところです。目を遊ばせると、窓の外の初夏の空を見続けてしまいます。隣の危機管理課の窓が開いていて、気持ちいい風が入ってきます。青空と小風、その二つが重なると子供の頃や、青春の頃を思い出します。お外で遊びたいのに、こんな天気のいい日なのに、中にいないといけない気持ちです。

2.背景の情報として、ドイツでは二学期が夏休みまでなので、6月に入ったら、ほとんどの人は「今学期も終わっている」ような態度で通学します。まぁ、私もそうでした。それと、キール市という私の故郷の町ではもう一つ特別な事態が関わってきます。それが、1882年から毎年の6月の第3土曜日から第4日曜日にかけて行われる「キール週間」というお祭りです。

簡単に説明しますと、ドイツ帝国時代から長い歴史を誇る世界最大のセーリングイベントです。例年約2000艘の船と50か国から5000人の競技者が集まり、すべて階級・船種のレース（Regatta レガッタ、船のレース）が行われます。

3.船のレースだけでなく、屋台、ステージ、移動遊園地、子供向けのアスレチック、2000を超える様々なイベントプログラムがあります。そうした全市が盛り上がる中、子供から大人まで抑えられない遊びたい気持ちが沸いてきます。学校の先生でも少し遅刻したり、生徒が宿題をせず、寝不足のまま学校に来たりしてもなんでも許される異常状態のキール週間です。

家族、友達、職場の人、スポーツクラブの仲間と一緒に港の遊歩道を歩いて、足を港湾に下げたり、ビールを飲んだり、体に悪い食べ物をたくさん食べたりしながら、ヨットボートを観賞します。毎日行く人もいるし、キール週間のハイライトである「Windjammer」（ウインドヤッマー）という何百隻ヨットが集結する帆船パレードや、最終日の打ち上げ花火を優先して行く人もいます。キール週間の間にバスなどの交通機関が特別なスケジュールで運行して、シャトルバスもありますが、まだ一人で行けない年齢の時、母に頼るしかなくて、強く訴えて連れてもらった記憶があります。母は人集りが苦手で、騒然としている場所や列に並んで待つことも苦手なので、考えてみると連れてもらったことが奇跡に近いです。というか愛の証でしたね。もっと考えてみると、今の私だと、人集りや騒然としている場所などが超苦手で行かないかもしれません。

それはそうとして、初夏の風に当たると青春、自由、遊びたいといった気持ちを思い出します。